

SESSION 2017

CAPES CONCOURS EXTERNE

SECTION : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES LANGUE ET CULTURE JAPONAISES

COMPOSITION EN JAPONAIS

Durée : 5 heures

L'usage de deux dictionnaires unilingues en langue japonaise (un dictionnaire de langue et/ou un dictionnaire de kanji) est autorisé.

L'usage de tout ouvrage de référence, de tout autre dictionnaire et de tout matériel informatique ou électronique (dictionnaire électronique, ordinateur, téléphone, calculatrice ou autre) est rigoureusement interdit.

Dans le cas où un(e) candidat(e) repère ce qui lui semble être une erreur d'énoncé, il (elle) le signale très lisiblement sur sa copie, propose la correction et poursuit l'épreuve en conséquence.

De même, si cela vous conduit à formuler une ou plusieurs hypothèses, il vous est demandé de la (ou les) mentionner explicitement.

NB : La copie que vous rendrez ne devra, conformément au principe d'anonymat, comporter aucun signe distinctif, tel que nom, signature, origine, etc. Si le travail qui vous est demandé comporte notamment la rédaction d'un projet ou d'une note, vous devrez impérativement vous abstenir de signer ou de l'identifier.

Tournez la page S.V.P.

SESSION 2017

**CAPES
CONCOURS EXTERNE**

Section : LANGUES VIVANTES ÉTRANGÈRES

LANGUE ET CULTURE JAPONAISES

RECTIFICATIF

Page 6

Au lieu de

浅野いのお『海辺の女の子』（太田出版、2011－2013年）

Lire :

浅野いにお『海辺の女の子』（太田出版、2011－2013年）

INFORMATION AUX CANDIDATS

Vous trouverez ci-après les codes nécessaires vous permettant de compléter les rubriques figurant en en-tête de votre copie

Ces codes doivent être reportés sur chacune des copies que vous remettrez.

► **Concours externe du CAPES de l'enseignement public :**

Concours

E	B	E
---	---	---

Section/option

0	4	3	0	E
---	---	---	---	---

Epreuve

1	0	1
---	---	---

Matière

7	8	2	1
---	---	---	---

以上のテーマについて、それぞれの次の4つの資料の比較分析に基づいて問題提起をし、構築された論文を日本語で書きなさい。

資料1：

我々は群集の中にいた。群集はいずれも^{うれ}嬉しそうな顔をしていた。其所を通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来るまでは、同じ問題を口にする機会がなかった。

「恋は罪悪ですか」と私がその時突然聞いた。

「罪悪です。たしかに」と答えた時の先生の語気は前と同じように強かった。

5 「何故ですか」

「何故だか今に解ります。今にじゃない、もう解っている筈です。あなたの心はとっくの昔から既に恋で動いているじゃありませんか」

私は一応自分の胸の中を調べて見た。けれども其所は案外に空虚であった。思い中^{あた}のようなものは何にもなかった。

10 「私の胸の中にこれという目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはいない積りです」

「目的物がないから動くのです。あれば落ち付けるだろうと思って動きたくなるのです」

「今それ程動いちゃいません」

15 「あなたは物足りない結果私の所に動いて来たじゃありませんか」

「それはそうかも知れません。然しそれは恋とは違います」

「恋に^{のぼ}上る階段なんです。異性と抱き合う順序として、まず同性の私の所へ動いて来たのです」

「私には二つのものが全く性質を^{こと}異にしているように思われます」

20 「いや同じです。私は男としてどうしてもあなたに満足を与えられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、^{なおさら}猶更あなたに満足を与えられないでいるのです。私は実際御気の毒に思っています。あなたが私から^{よそ}余所へ動いて行くのは仕方がない。私は寧ろそれを希望しているのです。然し……」

私は変に悲しくなった。

25 「私が先生から離れて行くように御思いになれば仕方ありませんが、私にそんな気の起った事はまだありません」

先生は私の言葉に耳を貸さなかった。

「然し気を付けないと不可ない。^{い け}恋は罪惡なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知っていますか」

30 私は想像で知っていた。然し事実としては知らなかった。いずれにしても先生のいう罪惡という意味は朦朧^{もうろう}としてよく解らなかった。その上私は少し不愉快になった。

「先生、罪惡という意味をもっと判然^{はつきり}云って聞かして下さい。それでなければこの問題を此^こ處^こで切り上げて下さい。私自身に罪惡という意味が判然解るまで」

「悪い事をした。私はあなたに真実^{まこと}を話している気でいた。ところが実際は、あなたを焦慮^{じ ら}していたのだ。私は悪い事をした」

先生と私とは博物館の裏から^{うぐいすだに}鶯^う 溪^きの方角に静かな歩調で歩いて行った。垣^{すきま}の隙間から広い庭の一部に茂る熊笹^{くまざさ}が幽邃^{ゆうすい}に見えた。

「君は私が何故毎月雑司ヶ谷の墓地に埋っている友人の墓へ参るのか知っていますか」

先生のこの問は全く突然であった。しかも先生は私がこの問に対して答えられないという事も能く承知していた。私はしばらく返事をしなかった。すると先生は始めて気が付いたようにこう云った。

「又悪い事を云った。焦慮^{じ ら}せるのが悪いと思って、説明しようとする、その説明が又あなたを焦慮せるような結果になる。どうも仕方がない。この問題はこれで止めましょう。とにかく恋は罪惡ですよ、よござんすか。そうして神聖なものですよ」

45 私には先生の話が益^{ますます}解らなくなった。然し先生はそれぎり恋を口にしなかった。

夏目漱石『こころ』1914年（新潮文庫、2004年）

資料2：

『志賀と僕』（『歓喜』所収）

志賀直哉^{なお や}と二人

向いあって

腰かけに腰かけて話している

ふと自分は昔のことを思い出した

5 四十年前に

自分達がまだ若かった時

こうして話していたことがあった。

当時は二人とも若かった

希望に燃えて

10 文学の話をしたり

画の話をしたり

未来の希望の話をした。
当時二人はまだ学生だった
恋の話もした。

- 15 今二人は六十以上の老人である
だが二人は昔と少しもちがわないつもりで
話をしている
しかし二人の肉体は
もうすっかり二人の老人であることを
20 語っている
夢のように四十年の月日はたってしまった
二人は今子供もあり孫もある。
二人は^{とし}齡を忘れて元気に
いろいろのことを話している。
25 だがすぎさった四十年
その間に二人は何をしたか
何を見、何を経験したか。

二人がこうさし向いでいる間に
四十年が経過して

- 30 二人の顔がその間に段々変って来たことを
映画にでもとってうつしたらどんな気がするだろう。
自分はふとそんなことを考えた。
志賀とこの四十年の間
何度さし向いに腰かけて話しあったことか
35 二人の友情は昔も今も変らないが
いつのまにか二人の青年が
二人の老人になっていた
年の^{しわざ}仕業を自分は感じて
今更に志賀の顔を見た。

亀井勝一郎編『武者小路実篤詩集』1953年（新潮文庫、1970年）

資料 3 :



浅野いのお『海辺の女の子』（太田出版、2011－2013年）

資料 4 :

にな川はいつも、昼ごはんの時間になると教室から出て行く。どこに行っているのか分からないけれど、昼休みが終わる頃になるとまた戻ってくる。今もやっぱり教室にはいない。

5 彼とは、一緒に無印に行ったことなんかまるでなかったかのように、教室ではお互いにおはようの挨拶さえしない。教室での私と彼の間には、なぜか、同じ極の磁石が反発し合っているような距離がある。授業の合間の十分休み、クラスのみんなが友達としゃべったりしているなか、にな川はいつも、背骨が弱っているみたいに机に片頬かたほおと片耳をべったりくっつけて寝ている。すると私はどれだけ疲れていて眠くても、なぜかその格好だけはしたくなくなる。しょうがないので、顔の前でいただきますをするみたいに両の手を合わせ、合わせた二つの親指の上に顎あごを置き、二つの人差し指に鼻と口を軽くつけて目を閉じる格好で、十分間をやり過ごす。

10 そのくせ授業中になると、私は頬杖ほおづえをついて、教壇のすぐ前の席に座っている彼を見つめている。背中を蹴った時のあの足裏の感触を反芻はんすうしながら。すると身体が熱くなってくる。でも目だけは冷静に、彼を“観察”している。目つきと身体の温度が相反している“冷えのぼせ”状態だ。こんな目つきで男子を見ることに、なんとなく罪悪感を感じて、にな川が少しでも動くとすぐ目をそらす。私の学校での鮮やかな感情といえ、この“冷えのぼせ”だけで、授業も教室の喧騒けんそうも灰色にくすんで、家に帰っても学校で何があったかよく思い出せない。たまった緊張のせいで背骨がきしむような痛みだけが残っている。

20 学校にいと早く帰りたくて仕方がないのに、家にいと学校のことばかり考えてしまう毎日が続く。昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、そろそろとカーテンの外に出ると教室にいるのは私一人になっていた。五限のスライド上映のため、みんな体育館へ移動したのだ。

[…]

「地震が起きたらいいのにな。」

25 呻うめくようにして呟かれた声を、私は聞き逃さなかった。オリチャンの MC と、合いの手の観客のハイな笑い声の合間をぬって聞こえてくる声に耳を澄ます。

「他の観客の奴らがパニックになって出入口に殺到しても、おれは一人舞台によじ上って、頭上で揺れてる照明器具にびっくりして動けないオリチャンを、助けるんだ。」

30 でも彼は絶対に地震が起こらないことが分かっている、絶望的な瞳をしている。こんなにたくさんの人に囲まれた興奮の真ん中で、にな川がさびしい。彼を可哀相かわいそうと思う気持ちと同じ速度で、反対側のもう一つの激情に引っぱられていく。にな川の傷ついた顔を見たい。もっとかわいそうになれ。

その時、腕を引っぱられた。絹代だ。私の耳に口を近づけて、
「にな川ばかり見てないで、ちょっとはステージも見たら？」

35 あきれたような、明るい声で言う。顔を見ると、笑っている。また何か言った。でも音が大きくて聞こえない、首を振ると、また私の耳に口を近づけて、はっきりと言った。

「ハツは、にな川のことを本当に好きなんだねっ。」

絹代は感動しているようで、照れたように私の肩を勢いよく叩いた。ぞっとした。
40 好き、という言葉と、今自分がにな川に対して抱いている感情との落差にぞっとした。

綿矢りさ『蹴りたい背中』2003年（河出文庫、2007年）